

# 「仏教と自然」研究班の概要と活動報告

研究班主任 田中 典彦

## 序 文

本書は佛教大学総合研究所共同研究班として、2000年4月から2003年3月まで、3年間にわたって研究してきた、「仏教と自然」（主任田中典彦）の成果をまとめた報告論文集である。ただし、最終的に本書に収録された論文はどこまでも研究員の関心と考察に基づいて執筆されたものであり、かならずしも班の研究としての統一した見解を示しているわけではないことを断っておきたい。本書は研究員の論文、研究ノート、さらに本班によって開かれたシンポジウムの基調講演とそれに対するコメントを収めたものである。本班の研究目的及び研究組織は次のとおりである。あわせて期間中の研究活動の記録として、定例研究会での報告発表の概略を掲げて序文にかえる。

## 一 研究目的

所謂東洋の宗教は自然との調和を重視し、それに畏敬の念を抱くことを忘れなかったとされ、他方西洋の宗教は自然を人間と対置し、自然を征服し、そこから多くのものを搾取すると言われてきた。しかし今日では、東洋でも自然環境の破壊が進み、その規模・速さがもはや深刻な事態に達していることは否定することが出来ない。そのような事態に陥った原因を、東洋の諸国が西洋社会の価値観や思想、生活態度を受容してきた（或いは受容せざるを得なかった）という一点にのみ求めるわけにはいかない。何故なら、現実として、我々が自然・環境に取り巻かれていながら、今日の事態を招いている以上、かつては自然と共存するという思想をもっていたはずの我々が何故西洋文明をいともたやすく受容してしまったのかということを自問しなければならないからである。仮に西洋社会が主導してきた科学文明に今日の自然破壊の原因があ

るとしても、我々は科学技術とそれによって生み出されてきた「快適な生活」を享受してきているのである。

我々はかつて持っていたはずの自然と共存する思想を一体どこに捨てて（或いは忘れて）来てしまったのだろうか。それは明確な人生観にまで高められていないことによるところ大であろう。ところで、人生観は自然の中の一存在様式としての人間を自覚することによって基礎づけられる。何故なら自然なくして人間は有り得ないからである。しかし、一方ではまた人間なしには自然が有り得ない。あるいは無意味であり、無価値であるとも考えられる。したがって自然をどう捉えるか、つまり自然観が重要となる。自然観は宇宙観・物質観・生命観そして自然と人間との関係を内容とするであろう。インド思想の一部である仏教が単に伝統的な儀礼や説法を固持し続けるものだけではなく、あくまで「生きるもの」に関わる、例えば人間にとっては倫理思想であり実践の指針である限り、そこに伝えられてきた思想は21世紀に生きる我々にとっての「生きた思想」でなければならない。ゴータマ・ブッダは徹底的な人間中心主義に立っていたと思われる。「縁起説」や「五蘊説」は途切れることのない生命の流れの中にあってはじめて人がありえることを教えている。この人間中心主義は大乗仏教の発生・展開とともに次第に宇宙的な広がりを見せてくる。例えば、自然世界の諸存在に偏在するという「仏性」の考えがそうである。

本研究が目指すところはそこにある。即ち、我々に受け継がれているいわば「思想の遺伝子」たる仏教を含むインド思想の中に、我々を取り巻く世界に対して我々が持つべき根元的な思想を見だし、明らかにすることである。それは十分に科学的でなければならないし、また示唆的なものであることが期待されよう。

## 二 研究組織（研究員所属先・研究協力者の職階は研究班当時）

田中 典彦（兼担研究員、主任・佛教大学文学部仏教学科教授・インド学）

（役割分担）インド諸思想の自然観

小野田 俊蔵（嘱託研究員・仏教大学文学部仏教学科教授・チベット仏教学）

（役割分担）チベット仏教の自然観

香川 孝雄（嘱託研究員・仏教大学文学部仏教学科教授・仏教学）

（役割分担）初期大乗仏教と自然【悉有仏性論】

辛島 静志（嘱託研究員・創価大学国際仏教学高等研究所教授・仏教学）

（役割分担）漢訳仏典・律の自然観

工藤 順之（嘱託研究員・創価大学国際仏教学高等研究所講師・仏教学）

（役割分担）インド思想の世界観

吹田 隆道（嘱託研究員・佛教大学文学部仏教学科非常勤講師・仏教学）

（役割分担）アーガマ文献の自然観

松田 和信（専任研究員・佛教大学総合研究所教授・仏教学）

（役割分担）部派・大乘仏教の自然【自然・世間】

梶山 雄一（研究協力者・創価大学国際仏教学高等研究所所長・教授（仏教学）

（役割分担）仏教と自然【業・輪廻・自然】

森山 清徹（研究協力者・仏教大学文学部仏教学科教授・仏教学）

（役割分担）大乘仏教（中観・唯識）【自覚・行為】

L. Schmithausen（研究協力者・Professor, Hamburg University・仏教学）

（役割分担）Buddhism and Ecology

Mark L. Blum（研究協力者・Associate Professor, Dept. of East Asian Studies, State University of New York, Albany.）

（役割分担）Environmentalism and Buddhism

### 三 研究計画・方法

#### （平成12年度）

本研究は「自然」・「生態」・「環境」等の現代的問題と大いに関係する、それらがインド思想、特に仏教思想の中でどのように扱い得るかが問題となる、従って、これらの概念に対する基本的共通理解の為に、自然科学や環境論、技術論関係の文献の収集が必要とされる。またそれら諸学の研究者からの助言も必要となる故、適宜特別研究会を開き、講演と討議の機会を持つ予定である。尚、本研究班では分野別の小班は構成せず、研究班全体としての会を運営した。また外国人研究者の参加が見込まれる為、インターネット、Eメールを活用した議論を行った。

#### （平成13年度）

前年度に得られた「自然」・「生態」・「環境」等の基本的共通理解に基づいて研究されるが、仏教思想中でのそれらに関わるキーワードが求められることとなる。例えば、sattva, loka, manusya, karman等が考えられる。それらの語の原典における使用例をできる限り収集し、資料作成を期す。

(平成14年度)

引き続き各自の分担領域に沿って研究の進展を図る。各週一回の研究報告発表を通じてその研究成果を報告し、討議した。

研究活動は月例研究会での研究報告とそれをめぐる討論を中心に進められた。また定例の研究会として、大学院生の希望者を加えて主として外国研究者の自然と仏教に関わる論文を輪読した。その間、各研究員はそれぞれの研究目的にしたがって研究を行った。自然科学や環境論など他の分野からの助言をいただくために随時にゲスト・スピーカーを招いて視野を広めることをにも努めた。

定例研究会の報告発表の概要は以下の如くである。

#### 平成12年度前期 共同研究班前期活動報告

「仏教と自然」研究班 研究班主任 田中典彦

「仏教と自然」研究班の初年度の目標はインド思想、特に仏教思想の中で「自然」・「生態」・「環境」等の問題がどのように扱い得るか、その研究の方向と方法を模索し明確にすることである。以下、これまでの研究会の営みを報告する。

〔第1回研究会 平成12年4月28日 発表：田中典彦〕

当研究班の研究目的、年次計画、研究会の進め方等について提案し、それらについて論議をした。本研究は「自然」・「生態」・「環境」等の現代的問題と大いに関係する。それらの問題をインド思想、仏教思想にいかにも求めるかについて種々検討した。

Lambert Schmithausen “The Early Buddhist Tradition and Ecological Ethics” を通常研究会にて輪読することとなった。

〔第2回研究会 平成12年6月2日 発表：田中典彦〕

「自然・生態・環境」

哲学、自然科学、生態学、環境学の立場からの自然理解。自然界はわれわれの内にも外にも存在しており、絶えず変化することによってわれわれに知られるもので、この変化が自然現象といわれる。仏教では、無常として捉えられている世界のことといえる。人間以外のものをも含む世界をも問題とし得るのは、大乘仏教、特に中国における天台仏教や華嚴仏教からであろうと考えられるが、その根底となる思想は初期仏教にもとめられる。縁起や五蘊が再考されるべきである。

〔第3回研究会 平成12年6月30日 発表：田中典彦〕

「初期仏教の伝統と生態倫理」

シュミットハウゼン氏の論文に基づいて種々の問題について検討した。特に仏教が自然に対して積極的な価値を認めているかどうかという氏の問いかけを中心に、そこに取り上げられている問題について検討を加えた。苦としての存在、縁起説や五蘊説は存在の価値と関わるか、業と存在、輪廻の問題、不殺生、慈悲等である。これらのことについては初期の仏教の教えにたいする再吟味、あるいは新しい視点からの再解釈も必要である。

〔第4回研究会 平成12年7月14日 発表：田中典彦〕

「視点と展開」

研究班の研究方向の具体化を図るため、これまでの研究会での議論の中から、キーワードを中心に検討を加えた。

- ・「自然」を意味する語：sva-bhāva, svayam-bhū, bhava (bhāva) 等
- ・「環境」に関わる語：vana, aranya, parvata, giri, nadi, sāgara 等
- ・「動物種」に関わるもの：sattva, jāti (例えば、四生), jāta 等に見られる動植物
- ・思想（教義）的に：縁起、五蘊、輪廻（業）、慈悲、不殺生戒、悉有仏性、世間、世俗諦、インド的アニミズム

これらの語とそれに関わる教えについて文献資料の収集が必要となる。

以下は通常研究会の内容である。

〔第1回通常研究会 平成12年5月11日〕“The Early Buddhist Tradition and Ecological Ethics”

I. Preliminary Consideration

〔第2回通常研究会 平成12年5月25日〕

II. Nature in the Context of the Ultimate Evaluation of Existence

〔第3回通常研究会 平成12年6月8日〕

III. Origination in Dependence and Ecological Ethics

〔第4回通常研究会 平成12年7月13日〕

IV. Early Buddhist Spirituality and Ethics in Relation to Ecological Ethics

〔第5回通常研究会 平成12年7月21日〕

V. Intramundane Evaluation of Nature

〔第6回通常研究会 平成12年9月10日〕

VI. The Status of Animals

VII. Conclusion

平成12年度後期 共同研究班後期活動報告

「仏教と自然」研究班 研究班主任 田中典彦

前期につづいて、インド思想、特に仏教思想の中に「自然」・「生態」・「環境」等の問題がどのように扱い得るかについて研究を進めた。通常研究会ではLambert Schmithausen “The Early Buddhist Tradition and Ecological Ethics”を一応輪読し終えたので、同氏の“Plants as Sentient Beings in Earliest Buddhism”を輪読することとなった。

〔第4回研究会 平成12年10月27日 特別講義：静岡理工科大学教授 志村史夫〕

「物理学的自然観—存在と認識—」

物理学の立場から自然を問題として展開された。見られる世界と見られない世界という問題から導入され、古典物理学と量子物理学について簡単に要約。すなわち古典物理学では観察するものと観察されるものは対立していてともに独立し存在する。そしてその考え方は因果律に基づく。しかし観察されるものは観察するものの「観察する」という行為によって影響を受けるミクロの世界では全てが不確定なものである。ミクロの世界の物質は粒子と呼ばれるが実は波の性質と粒子の性質の両方を持ち合わせ、全ての物質が無関係であることがない。これらはインドにいう「一如」や仏教の「空」に近いものであろう。われわれが観察し説明づけることのできる、つまり知ることのできる自然は全自然のほんの一部に過ぎない。人間が全自然を理解することは不可能であり、その間を埋めるものが思想、哲学なのである。

〔第5回研究会 平成12年11月10日〕

「前期総括と今後の研究」

前期の研究会を総括し、今後の研究について議論した。世界（loka）を中心に研究を進めることに決した。従ってlokaに関わる文献収集を始めることとなった。lokaは自然を含む世界（器世間）、人間世界（有情世間）を意味し、自然と人間に関わる正に当班の研究の核心と考えられるからである。

〔第6回研究会 平成12年12月22日 発表：梶山雄一〕

「sattva - Loka：業報輪廻説批判」

仏教の四大学派の認識論：有部の模写説（認識は外界の事物と対応する）；経量部の表象主義（外界は知覚できないが何物かが存在しなければならない）；唯識派の觀念論（あらゆる事物は心の表象にすぎず，外物は存在しない）；中觀派の一切空説（物心すべては自立・無変化・永続的実体としては存在しない）を説明。ついでそれらの派における業報輪廻説について詳細に検討。さらに大乘仏教について，業報輪廻とクローン人間（有部の業報輪廻はクローン人間複製に他ならない）という新たな問題へも踏み込まれた。

〔第7回研究会 平成13年1月26日 発表：小野田俊蔵〕

「ボン教の世界観」

ボン教の三期，つまりドルボン，キャルボン，ギェルボンについて触れ，それぞれの世界観についての発表がなされた。ドルボンは最初期のボン教で，そこでは死者を弔う儀式を中心とした世界観を見ることができる。第二期キャルボンでは不明確ではあるが山河の表現等からカイラス周辺の自然が世界観に反映している。天上界や地下界，海等への言及も見られる。第三期ギェルボンになると，仏教の世界観と同じものが見られる。すなわち，器世間，有情世界の説を有する。

〔第8回研究会 平成13年2月23日 発表：香川孝雄〕

「初期大乘の国土観」

大乘最初期の国土観：大乘仏教において最初に国土について述べているのは『八千頌般若経』である。当時の理想としての国土，猛獣や盗賊がいなく，水や食糧が自由に得られ，病気のない国土が願われている。『二萬五千頌般若経』と『無量寿経』では殺生を禁じること，全ての平等，卵生・胎生・湿生の生がなく，等しく一化生たらしめることが見られる。つづいて極楽世界の描写について詳細に検討された。

#### 平成13年度前期 共同研究班前期活動報告

「仏教と自然」研究班 研究班主任 田中典彦

前年度に見い出された研究指針である loka（世界）に関する原典資料の収集と，その語の示す意味からの思想的理解に中心をおいての研究が進められている。研究会での発表は，それぞれの研究課題に沿いながらも共通の取り組みに関連づけながら研究

報告がなされている。通常研究会では Lambert Schmithausen “Plants as Sentient Beings in Earliest Buddhism” を輪読している。

〔第1回研究会 平成13年4月27日 発表：田中典彦〕

「インド思想の自然観」

古代インドの自然観を Veda の中に求めようとした。そこでは自然崇拝が主であるが、その自然の根底に Rta が見い出されている。Rta は字義通りには「ものの成り行き」であるが、太陽・月・星などの規則正しい運行や季節の周期的な移り変わりの中に法則として捉えられたものであって、自然界では自然の法である。自然はこの Rta に順じながらも、それ自らの特殊性を有している。それは vrata (掟・特殊性) とよばれた。一方でそれはまた殆んど同義の dharma と称され、人間界の道徳的規範をも含んだものとなる。やがて dharma の観念が主流となった。

〔第2回研究会 平成13年5月25日 発表：森山清徹〕

「カマラシーラの無自性論証と因果論の吟味—ディグナーガの自己認識の理論の検証—」

loka は外界の対象（現象世界）と認識との関わりの問題でもある。現象世界が自性（sva-bhava：自己存在性）を有するか、有しないかということは仏教において極めて重要かつ基本的な問題である。全ての存在の無常なることと縁起を説く仏教は常住な自性（不変な自己存在性）は認めない。しからば無常なる自性はどうであろうか。因と果との関係性ということとなろうか。中観学派のカマラシーラに基づいて、これらのことが吟味された。原因と結果との関係の必然性が問題とされ、彼によって、因果関係は直接知覚（感官知、自己認識）によっても、推理によっても証明されないと論じられていることについて発表された。

〔第3回研究会 平成13年6月11日 特別講演：Lama Doboön Tulku（チベット活仏）〕

“Dalai Lama’s approach on the gloval environment”——Theory of Universal responsibility——（「地球環境に対するダライラマの姿勢—普遍的責任の理論—」）

21世紀に入り世界人類の生活はますます便利になって来ている。しかしそれと同時に我々は深刻な諸問題に直面せざるを得なくなっている。人工の激増、天然資源の枯渇、そして環境の危機等である。これらの課題に対処するにあたり、人類はより大きな「普遍的責任感」を育んでゆかなければならないというのがダライラマ14世の主張であり、我々仏教徒がその長い歴史の中で伝えてきた「縁起観」の今日的理解で



あろう。相互依存が自然の原則であることは改めて言うまでもない。無数の種類の生物はもちろんのこと、我々が住む地球から、海洋、雲、森林に至るまで、物質的現象のすべてに於いて、相互依存の原則が支配する世界であることを忘れてはならない。

〔第4回研究会 平成13年7月27日 発表：マーク・ブラム〕

“Buddhism and Nature in the United States”

日本仏教の中、道元の『正法眼蔵・山水経』に対するアメリカの諸学者の取り組みを紹介。さらに仏教と自然に関する諸見解が紹介された。「魂と魂の触れ合い（融合）こそ聖である。」あるいは「エコロジーそのものが仏教である」、共生のこと、「お蔭に生きる」等の主張があることを知り得る。Ecosattva, Ecokarma, Deep Ecology 等の新しい観点について発表された。

平成13年度後期 共同研究班後期活動報告

「仏教と自然」研究班 研究班主任 田中典彦

Lokaの共通テーマのもとに各自の研究を進めてきた。通常研究会では、外国著者の論文を読解。研究会での発表は次のとおりである。

〔第5回研究会 平成13年12月7日 発表：吹田隆道〕

「世界と欲—問題点と資料の中間報告—」

「世起経類」の資料に着目し、そこに説かれる人間社会の起こりに関する物語をとり上げて、人間の欲が世界の成立に関わるとする仏教の説を問題とした。資料論として先ず世起経類の資料を整理、その後 Aggañña-suttanta, DV (PTS) vol. III, pp 84-93 を和訳しながら内容について考察された。衆生（satta）の欲が衆生自らの在り方を形成してゆくと共に、この世界の変化をもたらすことが論じられた。そしてやがて環境破壊につながる。仏教ではそれらがかなり長いスパンでもってなされると捉えているが、現代われわれは苦の只中にある。したがって、苦の自覚に基づいて苦の滅に向かうべきであることが説かれる。本経の主旨が求不得苦にあることが考察された。

〔第6回研究会 平成13年12月21日 発表：辛嶋静志〕

「初期大乘仏典は誰が造ったか—林住比丘と村住比丘の対立—」

初期大乘仏典の成立に関して、経典の作者が林住比丘と村住比丘のいずれであるかをめぐって種々の資料に基づいて発表された。Pāli 文献に見られる両比丘について、

林住を讃える立場（AN III 341f, AN343. 23f）。林住を支持する立場（SN IV 35-4f）を中心に検討。さらに大乘仏典における両比丘について『法華經』を中心に多くの資料にて考察。大乘經典が林住、村住の両者によって造られた可能性を示した。

〔第7回研究会 平成14年1月25日 発表：工藤順之〕

「十不善業道と世界の成長・衰退—如何にしてカルマは世界を変えるか—」

世起經類の資料に基づいて、業による世界の変化が考察された。衆生の業がそれ自体に変化をもたらせるだけではなく、世界の変化にも大きくかかわる。いわば自業自得の側面のみではなく自業他得といった面があることがわかる。特に十不善業道による世界の衰滅が如何に説かれているかが検討された。殺生・偷盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見がその結果として外法つまり器の世界の変化をもたらすのである。そしてまたそれらによって世界の衰退がある。これらを Mahakarmavibhanga 等によって検討された。

〔第8回研究会 平成14年3月1日 発表：松田和信〕

「世親における縁起の法性について」

Abhidharmakosa I-8cd によって、有為法（道諦を除く）が苦であり、集であり、世間であり、見処であり、有であることを吟味。つづいて唯識では、全ては心の現われ、つまり言語に集約されることを示す。次に法性（dharmatā）についての考察。「仏の出世不出世にかかわらず、縁起の法は定まっている」をめぐって「因縁相応」第14經（Pratitya=雜阿含296）等の資料に基づいて検討して、縁起の語義解釈の決択、縁起の dharmatā, dharmasthitā, dharmaniyamatā の決択について考察された。

#### 平成14年度前期 共同研究班前期活動報告

「仏教と自然」研究班 研究班主任 田中典彦

「仏教と自然」という極めて難解な課題に取り組んでから、既に3年目（最終年）を迎える。長大な歴史と広大な地域性を有する仏教が領域であるが故に、さらに膨大な資料が研究の対象であることから、研究が進むにしたがって扱われねばならない問題が山積する。loka（世界）を中心に研究を進めてきた。仏教中における loka の用例はきわめて多く、空間的な領域を意味していると理解できるもの、時間的な意味を加えての過去世・現世・未来世、輪廻を媒介として此世・他世、インドの伝統的な使用であろうと考えられる sabba-loka（全世界）つまり天界・魔界・梵天界を含む世界な

どである。研究は、これらの loka の用例を吟味しながら、特に一般に理解されている自然（仏教では器世間：外的世界）がどのように捉えられているかに焦点を当ててすすめられている。自然を問うことは畢竟人間を問うことである。したがって自然と人間がどのように関わると捉えられていたかも重要な問題である。共業：有情の行為が業として外界に影響を与えるという思想の起源と展開が重要な問題として扱われる。

〔第1回研究会 平成14年4月26日〕

「総括と今後の研究」

前年度までの研究を総括し、今後の研究の進め方について議論、内容は上述した如くである。

〔第2回研究会 平成14年5月31日 発表：梶山雄一〕

「浄土教と宿業」

日本・中国の浄土教における善悪宿業について検討を加え、特に親鸞の宿業観について考察された。さらにそれに関わる諸氏の解釈を批判的に吟味された後、宿業が仏教の業思想とどのように関わることが問われた。そこでは十業道（十不善業道）の問題が『婆沙論』、『俱舍論』等を用い因果を中心に考察された。親鸞の善悪宿業は第二義的な等流果として解釈するよりないが、それは有部の正説である六因五果の理論とは整合しない。結局、有部的ではない、果報が熟するまで続く「無表業」を『成実論』、経量部、唯識派などの種子論によって解釈して始めて浄土教の善悪宿業を理論的に説明できることになると結論された。

〔第3回研究会 平成14年度6月28日 発表：マーク・ブラム〕

「仏教とディープ・エコロジー（2）—エコソフィとしての仏教—」

Deep Ecology について概観を示し、その共通の土台としての Ecology について述べられた。すなわち、一つの哲学や宗教に基づくのではなく、それぞれの思想から環境問題に関するところを自分のエコソフィの柱にすべきであるとする。その後、Ecology の立場から仏教がどのように捉えられているかについて言及。Deep Ecology には仏教の影響が見られることを指摘。エコソフィとしての仏教について考察。相対概念の超克に関しては、仏教の中道が考えられること。仏教の「法性」が Nature をも意味する。あらゆるものが縁起によって生じているから、人間をも含めてあらゆる

ものの性質 (nature) が「法性」である。現代、仏教の環境問題との関わりが期待と批判の両方面からなされていることが検討された。

〔第4回研究会 平成14年7月11日 発表：田中典彦〕

「loka (世界・世間) 考」

阿含・ニカーヤの文献に基づいて loka の持つ意味について考察。後の visuddhimagga には三界説 (sankhāra-loka, sattva-loka, okāsa-loka) が見られることについて触れ、それら三界について考察が加えられた。

#### 平成14年度前期 共同研究班後期活動報告

「仏教と自然」研究班 研究班主任 田中典彦

当班の研究課題は「仏教と自然」である。そこで当班では次のような手順で研究をすすめてきた。

- (1) 「自然」の理解：哲学・自然科学・社会学からの自然
- (2) インド思想の自然観：ヴェーダ・バラモン教・サーンキヤ・ヴァイシェーシカ
- (3) 仏教に見られる自然に関わると考えられる諸語の吟味
- (4) 仏教の展開の中に見られる諸要素，例えば「悉有仏性」「縁起」「一念三千」「器世間」など
- (5) 業輪廻の思想と自然の問題

等の問題に関して研究発表を中心に議論をした。

その結果、仏教における loka (世界・世間) に焦点を当てて研究をすすめることとなったのである。

〔第1回研究会 平成14年7月19日 発表：田中典彦〕

「Loka (世界・世間) 考」

Nikāya, 阿含経には実に多く loka が用いられている。単に空間的な領域を表しているとして理解できる loka, 時間的な意味を加えて過去世, 未来世, 輪廻を媒介として ayam loka (此世, 人間界), para-loka (他界, 他世), インドの伝統的な使用であると考えられる sabba-loka (全世界) つまり天界・魔界・梵天界を含む世界, そして Nikāya, 阿含経に説かれる最も仏教的な loka である。仏教の世界観を十分に理解する為には, これらの一々の用例を詳細に吟味考察する必要があるが, まずは経が直接世界, 世間について説くところに注目してみた。

SN. IV. P. 39 において、何が世界であり、世界の名義は何なのかが問われている。そこで答えられているのは、根・境・識によって捉えられているものが世界なのであるとされている。また、SN. IV. P. 52 においては破壊するが故に世界と言われている。SN. IV. P. 39 は有情 (sattva) と有情の名義についても全く同内容でもって説いている。つまり初期仏教においては、世界と全ての存在は人間の識との関わりにおいてのみ捉えているのである。

〔第2回研究会 平成14年11月22日 発表：Lambert Schmithausen〕

〔Man and World: On the Myth of Origin of the Aggaññasutta〕

初期の仏教経典の中で世界つまり器としての世界 (bhajana-loka) 生物の世界 (sattva-loka) について説くものの中で最も興味深い経典は Aggaññasutta に含まれている世界の起源に関する神話である、として取り上げられた。まず、その経の内容が紹介され、次いでそこに見られる種々の問題について検討された。何故この神話が Aggaññasutta に含まれたものとなっているか、本当にそれが世界と人間社会の起源と展開に対する仏教の考えを述べているものなのかについて考察を加え、さらにこの経典の示すところが初期の仏教の世界に対する態度、仏教の自然や文化に対する価値づけに関して何を語っているか等の問題について詳細に考察された。そこでは植物・動物を含めたいわゆる自然に対する仏教の態度がいかなるものであったかが、種々の観点から多くの資料に基づいて検討された。その結果、現代われわれが直面している自然保護や自然の多様性といった目的にはこの経の起源に関する神話はそれほど有益でないようであるとする。